C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　３月３１日現在

機関番号：21601
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19520577
研究課題名（和文）　日中戦争期における同仁会の活動実態

研究課題名（英文）　The activity of the Dojinkai, medical support group, in the Japan-China War period

研究代表者
中川 恵子（末永 恵子）（NAKAGAWA KEIKO SUENAGA KEIKO）
福島県立医科大学・医学部・講師
研究者番号：10315658

研究成果の概要（和文）：本研究では、日中戦争時の同仁会の医療・救護事業の具体的内容とその推移について明らかするとともに、会の組織的・経済的背景を解明した。人道支援を理念に掲げた同仁会が、戦時にあっては中立公平の立場で医療を提供することができず、軍の宣撫活動の一翼となる過程とその背景を明らかにした。「日中戦争期における対中国医療支援事業の変容－同仁会の医療支援について－」（『宮城歴史科学研究』６８号、２０１１年）に本研究の概要を掲載した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I elucidated the medical care of the Dojinkai that was medical support group at the time of the Japan-China War. I analyzed the economical background and organization of the group. The Dojinkai had an idea of the humanitarianism. But the group could not keep an impartial viewpoint. It became a part of advertising of the military of Japan. I explained a process and the background where it was not to be able to provide medical care in a situation of the neutrality fairness when the wartime. I placed the summary of this study in "Miyagi history scientific research" 68.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：近現代史、植民地医学、戦争責任、日中戦争、医療支援、同仁会、南京事件、国際連盟

１．研究開始当初の背景

私は、アジア太平洋戦争期に日本の支配地域において展開された医学・医療について研究してきた。特に医学者・医療従事者による非人道的な研究、すなわち医学犯罪がなぜ行われたのかという観点から、その歴史的状況と特質とを研究してきた。医学犯罪の歴史的位置づけに関しては、例えば、731部隊の医学研究を成立させた日本の医学・医療（研究内容・臨床倫理・医学界・医学教育・臨床）の背景を解明する必要があることを感じてきた。そして、この背景の考察に必須なのは、植民地医学の把握であると考えるようになった。すでに、植民地医学のケーススタディとして、中国東北部において植民地医学を展開した満州医科大学における医学研究・医学教育・医療の実態を明らかにした（『戦時医学の実態―旧満州医科大学の研究―』樹花舎、2005年）。その過程で旧満洲国の植民地医学・医療の把握と評価のためには、比較対照するための組織および地域が必要なことを痛感した。旧満州国と他の日本軍占領地域の共通点と相違点を見出し、総体的に日本の植民地医学・医療を描きたいと意図したのである。

中国における植民地医療の主たる担い手は同仁会であった。同仁会とは、1902（明治35）年に「清韓其他亜細亜諸国に医学及之に随伴する技術を普及せしめ且彼我人民の健康を保護し病苦を救済する」との目的で設立された医療関係の財団法人である。同仁会については、丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動　同仁会研究」（一）～（四）（『日本医史学雑誌』45-４，46-1,46-2、46-4,1999～2000年）が創立当初から解散までを時期区分し通史を描き出した。また、飯島渉は、マラリアに注目しながら帝国医療を担った同仁会の戦時期の動きを外務省記録によって明らかにしたが（『マラリアと帝国―植民地医学と東アジアの広域秩序』東京大学出版会2005年）、あくまで衛生活動による秩序再編という視点からまとめられていた。同仁会は、戦争協力によって戦後ＧＨＱにより解散命令を受けたにもかかわらず、同仁会の診療・防疫活動の詳細な実態や軍への協力の問題は未だ解明されてはいなかった。

２．研究の目的

本研究では、Ⅰ同仁会の活動、Ⅱ同仁会への人材動員、Ⅲ活動の現地への影響を実証的に明らかにし、この非軍事部門の医療団体を広く歴史的社会的に位置づけることを特色とする。この研究の後はじめて、満州医科大学の植民地医学・医療との比較検討が可能になり、総体的に中国大陸における日本の植民地医学・医療の把握が出来るようになる。

その際の視点は、医学・医療者集団のあり方を考えるというもので、現在の医療倫理にフィードバックさせて考察することが本研究の独創的な点である。実証研究に徹しつつも、わが国の医療倫理が依拠すべき（反省すべき素材として）倫理学的視点を念頭に置きたい。戦時中の医学研究・医療活動の事実を可能な限り解明し、それに倫理学的分析を加えて、今日の医学研究や先端医療への対処方針を学び取ることが本研究の意図の社会的意義である。

さらに、わが国では、戦時研究に関する多くの資料が焼却処分に附され、“戦時研究”にとっては手痛い状態である。中国東北部、朝鮮半島をはじめ旧日本支配地域・影響圏の実態を知る資料についても、十分にあるとは言い難いので、この分野の資料の発掘にもつとめる。

３．研究の方法

本研究は２つの方法論、すなわち文献および文書記録類を資料として、そこから歴史的事実を構成するという文献実証と、関係者へのインタビューから当時の実態を想像するという方法論をとる。

４．研究成果

成果は以下の４点にまとめられる。

（１）外交史料館所蔵の同仁会関係資料を中心に資料の読み込みを行い、日中戦争勃発後に、なぜ、同仁会が、対中防疫活動に乗り出したのかを明らかにした。すなわち日中戦争後すぐに打ち出された国際連盟の対中医療援助策は、中国に欧米重視の外交政策を放棄させたい日本にとって障害であった。そのため日本の外務省は、中国に対する日本の影響力の拡大を期して、同仁会による対中国防疫支援政策を打ち出したのであった。しかし、日本の同仁会による防疫班は、軍の命令下に置かれたため、活動は必然的に日本軍のための宣撫とならざるを得なかったことを明らかにした。

（２）同仁会が中国の上海や南京において診療所や病院を設置した場所を訪れ、当時の建物が現存していることを確認した。上海・南京のそれらの施設の中には、英米系キリスト教関係の病院であったものを日本軍が接収して、同仁会病院に使用させていたものもあった。そして、それらの病院は、戦後は中国の医療機関となっていたことを確認した。

（３）南京陥落の際、南京安全区国際委員会が南京に在住した欧米の企業人・宣教師・大学教員・医師たちによって設けられた。その中の医師たちは、主に安全区内の鼓楼医院において多くの患者・被災者・難民の治療にあたった。しかし、日本軍は、難民救済が、南京市自治委員会の所管事項であるとして、欧米人でつくる安元区国際委員会の影響力を極力排除しようとした。また、日本軍の占領統治を効果的に行うために医療宣撫活動が必要となった。そのために派遣されたのが、同仁会の診療班と防疫班であった。実際の医療現場では。戦争の被害者である南京市民が、軍を背景に持つ同仁会に対して信頼を寄せるには、溝がありすぎて困難であった。

（４）国立国会図書館において青木義勇文書を閲覧複写し、解読を進めた。青木義勇は、日中戦争中に同仁会漢口診療防疫班に勤務した細菌学者である。彼は、日中戦争期の同仁会についての著作『同仁会診療防疫班』も残している。

青木は、この著作を準備するにあたって、同仁会の職員だった元同僚たちに手紙を送り、戦時中の状況を寄せてもらっていた。その報告内容は、実体験に基づいた貴重な内容であった。この資料の読解はまだ不十分であるので今後進めて行きたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１３件）

主要な論文５件

① 末永恵子、日中戦争期の同仁会による対中国医療支援、日本の科学者、査読無、４４巻８号、２００９、４２～４３ページ

② 末永恵子、生体実験を拒否した生理学者横山正松、日本医史学雑誌、査読有、５４巻３号、２００９、２３９～２４８ページ

③ 末永恵子、南京事件の難民への医療支援-南京安全区国際委員会と同仁会、１５年戦争と日本の医学医療研究会会誌、査読無、９巻１号、２００８、１３～１８ページ

④ 末永恵子、１５年戦争期の大学における医学研究－旧満州医科大学を事例として－、日本の科学者、査読無、４３巻２号、２００８、１６～２１ページ

⑤ 末永恵子、日中戦争期の国際連盟による対中防疫支援と日本、１５年戦争と日本の医学医療研究会会誌、査読無、８巻１号、２００７、４１～４７ページ

〔学会発表〕（計７件）

主要な発表５件

① 末永恵子、朝鮮植民地化過程における日

本の医療進出、日本科学者会議第１８総合学術研究集会、平成２２年１１月２１日、仙台

② 末永恵子、日中戦争期における対中国支援事業の変容－同仁会について－、宮城歴史科学研究会大会、平成２１年９月２６日 、仙台

③ 末永恵子、医学・医療者の戦争責任、日本科学者会議第１７回総合学術研究集会、平成２０年１１月２３日、名古屋

④ 末永恵子、戦争と医師-医師の戦争体験と反戦・反核運動、第２３回保団連医療研究集会、平成２０年１０月１２日、仙台

⑤ 末永恵子、日中戦争期における同仁会の戦争協力、侵華日軍第７３１部隊国際学術検討会、平成２０年９月１９日、哈爾浜（中国）

〔図書〕（計１件）
国内外の別：国内
刈田啓史郎、一戸富士雄、末永恵子、河相一成、みやぎ憲法九条の会、戦争と医学―七三一部隊等の加害責任を問う―、２０１０、９５ページ

６．研究組織
(1)研究代表者
中川　恵子　（末永　恵子）
（NAKAGAWA　KEIKO　SUENAGA　KEIKO）
福島県立医科大学・医学部・講師
研究者番号：10315658

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし